

労働安全衛生研修会

総務委員会

令和5年11月18日13時30分から、大王製紙株式会社可児工場において、労働安全衛生研修会を開催しました。

研修会の概要を以下のとおり、報告します。

[開会]

開催にあたり、大坪専務理事から、産業廃棄物の排出から処理に関わる者として、廃棄物処理法を遵守は当然ですが、それ以外の他法令についても、当然、遵守していかなければならず、とりわけ、従業員の労働に関して安全を確保することは、従業員の方のみならず、企業にとっても、大変重要なことである。労働安全衛生の講習や研修を受ける際には、4S、ヒヤリ・ハット、安全確認などがキーワードとなっていますが、ここ大王製紙株式会社可児工場では、安全の三本柱である「安全な意識」、「安全な環境」、「安全な仕事」のもと、4S対応、ヒヤリ・ハットを見逃さず、社員一人ひとりが生き生きと働ける「安全で活力のある安心第一の職場環境づくり」を目指され、先駆的な取り組みを、研修の場として提供いただいた田坂工場長をはじめ、ご担当者に感謝を述べ、参加者に対して、実り多き講習会になること、明日から労働安全衛生に役立てていくことを期待する旨の挨拶がありました。



田坂工場長様による会社概要説明

[工場概要]

田坂浩明工場長(当協会理事)から次のとおりご説明をいただきました。

大王製紙株式会社は、植林木チップや古紙からパルプを製造し、これを原料に、家庭の中で使用されるものから工業用途まで様々な種類の紙を作るパルプ・紙の一貫生産を行っています。

当工場は、ティッシュペーパー、トイレットペーパー、キッチンペーパーを製造しており国内シェアは40%で、大王製紙グループ最大生産拠点となっています。

その他にも、菓子、インスタント食品など広範囲にわたり、使用されている食品包材や包装紙、ショッピングバックで印刷や加工に適する包装・製袋用の紙を生産しています。

従業員数は、可児工場と川辺工場、関連会社を含め、1,200人が勤務しています。

1956年、昭和31年の創業後、各種用紙製造工程を増やししながら、現在の工場敷地面積は456千㎡で、バンテリンドーム名古屋の9倍の広さを有しています。

可児工場は、大王製紙グループでは、三島工場に次ぐ規模の生産拠点となっています。

製紙原料は輸入材として広葉樹チップを、国内材として針葉樹チップを使用し、輸入材チップは、毎日150台のトレーラーで可児工場に運び込まれています。

また、チップ中の樹脂分を燃焼させるバイオマスボイラーを設置しており、発電量は55,000kwで90%を自家発電で賄い、発生する熱は、420ton/日で、紙の乾燥に用いている。将来は電気の使用量を100%になるよう計画を進めているところです。



[発生した労働事故からの対応事例と対応]

労働安全衛生ご担当の神戸恵太様から、可児工場で起きた労働事故の概要と会社での対応について、ご説明をいただきました。

事例1 挟まれ事故

概要

ソフトバックティシュラインハンドル排出コンベアのローラー間に右手挟まれ災害でトラブル時の調査で運転しているコンベアの真下に入り点検中、ベルトの摩耗が気になり、指先で触れてしまった際にローラー間に右手を挟まれた事案です。

原因

安全活動の中で、リスクとして抽出されていなく、運転しながらでないことを確認できないという意識、固定概念があったと考えられる。違和感なく同じ作業を繰り返していくうち

に、不安を感じることなく常態化してしまったことが原因と考えられます。

リスク抽出

- 1) 今までを当たり前と思わず、稼働中の機械に関するリスクの洗い出しの実施
- 2) 他加工ライン同士で相互点検を行い、当該設備担当者に見えていなかったリスクを抽出

対応

リスク抽出の結果を基に、「安全確保の前提にたったやり方の追求」に着手しました。

こうだから止められないという妥協ではなく、まず止めて、その結果を踏まえ、何が必要かを考えることを基本とし、基準書の見直しや危険作業の排除を実施しました。

また、動作中の機械への接触を防止するため簡易カバー取り付けや床面の塗分けによる見える化を実施しました。

事例2 切創事故

概要

4 m幅のログを2 m幅に切断する作業時に、歯の切れがいつもより悪く力を加えた際にログの向きが変わり、刃先が体に向いていることに気付かず、カッターナイフが抜け、右足大腿に刃先が刺さった事案です。

原因

経験が浅く、いままではうまくいっていたが、ログの向きが変わることを十分に理解していなかった。

リスク抽出

- 1) 経験が浅い者からみたリスクの洗い出しの実施
- 2) カッター使用時の耐切創対策が十分かどうか

対応

リスク抽出の結果を基に、

- ・カッターナイフ使用作業の抽出と安全なやり方への見直し
- ・カッターナイフの仕様変更をし、汎用品よりも安全性の高いセーフティーカッターの導入
- ・従来のカッター使用時は、耐切創手袋の着用のみであったが、今回の切創事故を受けて、カッター使用時は、従来 of 切創手袋に、耐切創アームカバー、耐切創エプロン着用で作業を行うルール化の実施
- ・未熟練者に対する教育・フォローアップの強化

最後に、「二度と同じ災害は発生させない」という強い思いで、被災「0」に向かっていくと強い意志を示され、説明をまとめられました。

[工場内視察]

参加者を2班に分けて、工場内を視察しました。



[質疑応答]

参加者から、以下の質疑があり、それぞれ回答をいただきました。

質問1 外国人労働者は雇用していますか。雇用している場合、注意喚起はどのようにして見えるか。

回答1 直接の雇用はないが、部門により外国人労働者の方もみえるので、ポルトガル語など必要な言語で注意喚起を行っている。

質問2 ヒヤリ・ハットの事案はどのように把握しているのか。

回答2 各作業ごとに作業中、作業後にミーティングを行い、把握に努めている。

研修終了後、國本総務委員長から、今までの労働安全衛生研修会とは異なり、実際の現場で行われている労働安全衛生の取組みを知ることができ、大変素晴らしい研修会となりました感想と、本日の研修会で得られましたことを参考に、明日からの企業における労働安全衛生に活かしていただき、無事故で事業を遂行していただくよう参加会員へお願い申し上げ、業務ご多忙の中、私ども会員に、このような貴重な機会を提供していただきました大王製紙株式会社可児工場の田坂工場長様をはじめ、ご担当していただいた職員の皆様にお礼を申し上げ研修会を終了しました。